

# 釜石製鉄所における三鬼隆と生活構造

戦前期における企業人の社会的形成とアソシエーション

高木 俊之

---

- 1 本論文の課題と意義
- 2 釜石製鉄所における三鬼隆と生活構造
  - 2-1 背景にある激しい争議
  - 2-2 真道会の結成
  - 2-3 三鬼隆の経歴
  - 2-4 企業人の社会的形成とアソシエーション
- 3 まとめ

## 1 本論文の課題と意義

岩手県釜石市<sup>(1)</sup>は、その甲子町大橋において大島高任（1826～1901）がわが国で初めて1857（安政4）年に洋式高炉で出銕に成功した近代製鉄業発祥の地である。岩手県鉱業会のまとめによると、釜石鉱山は上閉伊郡の甲子、上郷、栗橋の三村にまたがっており、新山と佐比内の二鉱床を中心とする埋蔵鉱量1,000万トンを有する本邦第一の鉄鉱山である（岩手県鑛業會編,1950:349-351）。明治維新を迎えると、富国強兵には鉄が欠かせないので、鉄鉱石に加えてその後背地に豊富な木炭も期待できる釜石に、八幡製鉄所の操業（1901年）よりも20年も早い1880年に官営製鉄所が開業した。ところが官営による試みはわずか2年で頓挫し、製鉄所は民間の商人である田中長兵衛に払い下げられた。そして責任者となった横山久太郎と地元出身の高橋亦助、村井源兵衛らの熱意（半沢,1974:263-282;小倉,2001:80-89）による49回目の操業で1886年10月に初出銕に成功した。それ以降、釜石製鉄所は民間随一の製鉄所として発展<sup>(2)</sup>していくことになる。

本研究では、その釜石製鉄所の長い歴史のうちから、大正中期の1919年から昭和に入った1938年までを対象時期として取り上げることにする。その底意は、わが国の自発的集団、すなわちアソシ

---

(1) 岩手県上閉伊郡釜石町は、1937年5月5日に市制が施行され釜石市になった。これは岩手県においては1889年4月の盛岡市に次ぐ二番目の市制施行である。しかし、この時点での市域は現釜石市と同じではなく、甲子町、鶴住居町、栗橋町、唐丹町を除いた旧市である。これらの地域が釜石市に合併されたのは昭和の市町村合併の1955年4月1日からである。

エーションについての関心にある。丸山眞男が『忠誠と反逆』で指摘しているように、わが国では、徳川幕藩体制において封建的身分・ギルド・自治都市・地方団体といった中間勢力の独立性は弱体化してただけでなく、その伝統は、近代日本において自発的集団の中に新しく生かされもなかった（丸山,[1960]1992:57および108）。そうした中で、上からの近代化が押し進められたために、わが国においては職場においても地域社会においても対等で平等な人間と人間の横の関係に基づく集団、すなわちアソシエーションが生成されず、常に身分的な上下関係を伴う縦の序列に基づく集団が作り出されてきたといえよう。特に大企業においては第一次世界大戦以降に、年功賃金制度の創出と福利厚生充実による従業員の「子飼い」によって従業員は企業内の小宇宙で生活のすべてがまかなえるようになったため、従業員は企業外の地域社会に関心を持たなくなってしまう。そのため、業務命令に従う義務が付随する身分的秩序を内包している会社を離れた場所で成り立つはずの対等で平等なアソシエーションが存在する余地がなかった。こうしたことを中川敬一郎は、Richard.Eellsのメトロ・コーポレーションの概念を用いて警告している。メトロとは母胎のことであり、従業員は母胎の中の胎児のように、生活に必要なものすべてを会社から供給されるようになる。そうすると企業は小さな国家のようになり、その企業の従業員は企業外部の市民社会に関心を持たなくなってしまう、「草の根デモクラシー」が育たないことになってしまう（中川,1981:193-195; Eells,1960:50-68=1974:60-83）。

ところが、本研究が対象とする上記の時期の釜石製鉄所においては、職員と職工がともに構成員となる一種のアソシエーションが形成されていた。そして、そのアソシエーションの中心となる職員たちはその関心を会社内にとどめず、優れた企業人として社外の地域社会の発展にも大きく関心を持っていた。社会集団論の観点から規範的に望ましい社会のあり方をいえば、それは企業においても地域社会においても、アソシエーションが自由に生成し、そして連関を持ち補いあって重なりあうことである。そうしたアソシエーション形成の契機とそれが企業人の社会的形成に与えた影響を探るのが本論文の課題である。

そして、この研究の意義は懐古的なものにとどまらず、現代的な意義もあることを付け加えておきたい。最近、構造改革特区といった地域振興政策が検討されてきている。わが国において、人に投資をせずに「箱もの」をつくることに終始した高度経済成長期以後の地域振興策への反省として、国際的視野を持ちつつ地域社会で行動できる「Think Globally, Act locally」な人材の養成が喫緊の

---

(2) 釜石製鉄所は経営形態や経営主体が以下のような変遷を経ているので、その名称も様々に変わっている。

官営釜石製鐵所（1880～1883）。 田中長兵衛の個人企業である釜石鑛山田中製鐵所（1887～1917）。 経営を株式会社にし、田中鑛山株式会社釜石鑛業所（1917～1924）。 三井鑛山の傘下に入り、釜石鑛山株式会社釜石鑛業所（1924～1933）。 製鐵合同に参加し鉾山部門を分離して日本製鐵株式会社釜石製鐵所（1933～1950）。 日鉄解体に伴い富士製鐵株式会社釜石製鐵所（1950～1970）。 八幡富士の合併によって新日本製鐵株式会社釜石製鐵所（1970～）。 現在は線材と電力が事業の中心（新日本製鐵株式会社,2001）になり新日本製鐵株式会社棒線事業部釜石製鐵所である（なお煩雑になるため本文では原則として「鉾」と「鉄」の字を用いる）。

従って、製鐵合同までは製鐵所といっても鉾山の採鉾所も含んでいる。また三井時代は鉾業所といっても製鐵所も含むわけである。

要請となっているわけである。ところが人材の養成には箱ものをつくるよりも長い時間と手間がかかる上に、育てる側に広い視野と深い教養をもってリーダーシップを発揮する人物がなくてはならない。それが理解されていない以上、現在のところまで有効な方策が出ているとはいえない。ところが実業の世界で、わが国においてそうしたことは、むしろ公的な施策や学校で行われてきたことよりも、近年に至るまで企業人による私的な集まりを通じて陶冶されてきている<sup>(3)</sup>。戦前期の釜石におけるアソシエーションのあり方を、企業と地域社会における人材の涵養と見るならば、現在も学ぶべきものがある。

理論的課題としては、上記の課題をわが国の基幹産業である鉄鋼産業とともに明治に生まれ大正・昭和と生涯を送った三鬼隆を代表とする企業人の経歴（career）を生活構造と捉えて明らかにすることがあげられる。経歴を社会学の用語で表現するならば、それは分化した社会構造の中における地位と役割の累積である。だが、もう少し文学的に表現するならば、経歴とは人が職業生活および地域社会において歩んできた「足跡」<sup>(4)</sup>のことである。足跡は、後続の者が同じ所を歩くことにより轍となり、次第に道となっていく。言い換えれば、ある集団を構成する人々の経歴を分析し総合するということは、個人的な行為が積み重ねられ、次第に社会的な慣行となっていくプロセスを見ることである。従って、それは単なる個人の生活史分析とは異なる。

人間は社会生活をしていく上で様々な集団に属し、また集団を新たに形成しながら経歴を積み重ねていくとするならば、その集団遍歴を示す経歴はある社会の構造を示すもので、それを個人の側から見ると生活構造<sup>(5)</sup>と呼ぶことができる。通常、経歴とは職業生活における足跡のことであるが、個人の集団への参与を生活構造と考えるならば、地域社会における足跡も含まなければならない。人は職業生活のみにて生きるわけではなく、土着性をもって地域社会に生きているからである。その後者を等閑にしてきたのが、わが国の戦後の大企業における生活である。そのことの反省を込めて、この時代の民間随一の製鉄所における企業人の生活構造を明らかにすることは、今日の地域社会の再生に関して参考になる。

---

(3) 岐阜県大垣市では、地元へ本社を有する東証一部上場の社長が、地域の発展に資する人材の養成のため私的勉強会を開いていた。その会のメンバーが次第に頭角を現し青年会議所（JC）を結成したり、体育連盟の種目別のリーダーとなり後進を育てた。長ずるに及んで、そうした中から市長、市議、行政担当者、地元企業の経営者といった地域社会を担う人材が輩出している（高木俊之,2002）。

(4) これは稲上毅教授が講義中でキャリアを「足跡」と表現したことをヒントとしている。それに古島敏雄の近世における道の発展と中馬の歴史（古島,1983）を参考に肉付けした。

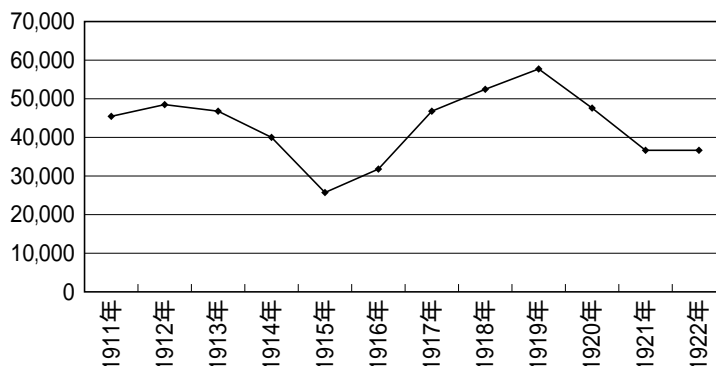
(5) 倉沢進は「社会構造は分化した諸社会層と諸集団の関係の網の目としてとらえられるが、生活構造は個人がこれら諸社会層と諸集団のいずれに、いかような役割を通して参与しているか、すなわちこれら集団参与の総体としてとらえられる」（倉沢,1968:216）と述べている。本研究においても、個人の集団への参与を生活構造と考えている。そのことを明らかにするために個人の経歴＝「足跡」を分析する。

## 2 釜石製鉄所における三鬼隆と生活構造

### 2-1 背景にある激しい争議

まずこの時期の鉄鋼産業の経済情勢を知るために釜石製鉄所の生産量を示す図1を掲げる。特に高炉を擁する釜石製鉄所の消長を示す銑鉄の生産量に注目する。日清日露の両戦争後も鉄鋼需要は好調であったが、それも終わりを遂げ、1915年の釜石製鉄所の銑鉄生産量は25,000トンにまで落ち込んだ。ところが第一次世界

図1 釜石製鉄所における銑鉄生産量(単位:トン)



資料: 富士製鐵釜石製鐵所(1956:付録)から作成

大戦中盤の1916年4月には、まずイギリスが「鉄類の市価は奔騰し延いては武器及艦船の建造に支障を来すの虞ある」(『中外商業新報』1916年4月18日)ため鉄類の輸出禁止に踏み切った。次いでアメリカとインドでも同様の措置が取られた。そのため、釜石の銑鉄に対する需要は激増することになった。それに対応するため設備の拡張が行われ、1917年には第八高炉が、1919年には第九高炉がそれぞれ120トン炉として操業を開始した。そのため1919年には銑鉄の年産「58,000tという操業以来の最高記録」(富士製鐵釜石製鐵所,1956:200)を達成した<sup>(6)</sup>。

そうした増産によって「大戦中、鉄鋼業は、どの会社も莫大な利益を上げることが出来たが、その反面に作業は甚だ繁忙を極め作業時間も延長され」(小島,1984:530)ていた。鉄鋼産業は、最先端の技術と高い熟練労働を必要とする産業であるのにもかかわらず、いずこの経営者にも労働条件や福利厚生を向上させる余裕がなかった。後述する争議の後に、仙台鉱山局が釜石鉱業所の労働者の生活を裁判所に報告している。それによると、この当時の労働者の長屋は棟割長屋で下水設備もなかった。一つの娯楽機関もあるわけではなく、入浴には一回一銭の料金さえ徴収していた。また会社は全労働者に三割の増給を約束したが、一様に三割の増給を行わず、従来低かったものには多く、高かったものには少なく増給した。そのため増給分の差は10倍にもなる場合があり、不公平感は大きかった(釜石製鐵労働組合史編纂委員会,1961:57)。また岡崎哲二の計算によると、この時期の釜石製の銑鉄は輸入銑鉄に対して高い市場競争力を持っていた。しかし、それは鉄鋼先進国であ

(6) この頃勃興した鉄鋼業は「戦時利益に均霑できず戦後は忽ち大反動に襲はれ、企業の財政的基盤は全面的に崩壊に瀕した」(小島,1984:520)のである。1920年3月から株価が暴落しはじめ戦後恐慌が始まっている。そして図1に明らかなように、釜石製鉄所においても1920年からたちまち銑鉄の生産量が減少している。

る米英の1/7～1/4という製鉄所の低賃金と、これまた労働集約性の高い同所の鉱山から採掘される鉄鉱石によって確保された競争力だったことが明らかになっている（岡崎,1993:9-12）。

これに類することは釜石に限らず、当時の日本各地に見られたことである。そのため、この時期に労働争議が頻発するようになった。その背景として、大河内一男の『暗い谷間の労働運動』から社会情勢について要約する。大正中期の労働者の生活は、失業者こそ少なくなったが、過度な長時間労働や日曜出勤で身体はくたくたになるわりには、物価の暴騰で生活は一向に楽にならなかった。そうした中、富者の心構えの一新を説く河上肇の『貧乏物語』が1916年に新聞に連載され好評を博し、翌年刊行されベストセラーとなる。また1917年にロシアでは、世界ではじめて社会主義革命が成功し社会主義国が成立している。その一方で、国内では戦争の経済に与える影響から物価の暴騰が起こり1918年に米騒動が起こっている。また藩閥支配の非立憲内閣への批判として吉野作造の主張する民本主義の運動も起こっていた（大河内,1970:47-66）。こうした社会情勢も相まって1920年2月に職工と職夫の待遇改善を求めて起こったのが、浅原健三の『鎔鑪の火は消えたり』で有名な官営八幡製鉄所のストライキである。しかしその前年の1919年から「釜石、神戸製鋼、川崎造船、日本製鋼所等が一斉に相次いで罷業騒ぎに見舞はれ」（小島,1984:520）ていた。

特に釜石鉱業所では1919年11月～12月に製鉄所と採鉱所の職工が待遇改善のため激しい争議を行った。この争議は、指導者の荒木田忠太郎によって、町の三方を屏風のような山に囲まれた釜石で、工場の中で働くことしか知らなかった労働者が初めて自由と解放の狼火を挙げたということから「狼火挙る」（荒木田,1952:2）と名付けられた。

『釜石鉱山労働運動史』によると、この争議には足尾銅山に本部を置いた大日本鉱山労働同盟会が大きく関わっている。足尾銅山では1919年9月に坑夫による争議が行われ、労働条件の改善を要求していた。大日本鉱山労働同盟会には、その中にかつて釜石鉱山で働き辛酸を嘗めた者がいたこともあって、同じ鉱工業で東洋一といわれた釜石鉱業所にも支部をつくろうとしたわけである。そのため1919年11月2日に、同会の幹部と顧問弁護士が演説をするために釜石に來訪し投宿した。その旅館に偶然居合わせ釜石町で代書業をしていた荒木田忠太郎が同盟会の釜石支部長を引き受けることになり、11月9日には支部の発会式が行われた。釜石鉱業所の約4,000名の労働者の内、入会者は2,200人に達した。そして18項目の待遇改善要求を鉱山事務所の所長に提出した（釜石鉱山労働組合史編纂委員会,1966:35-45）。

その後起こったことから、この争議がいかに激しかったかは荒木田の記述からうかがい知ることができる。それは今日の労働法によって権利として認められたストライキではなく、罷業と争議としかいいようがないものである。例をあげると、製鉄所の構内にはどこから集めたかと思われるほどの警官が立ち並び、交渉に際して起こった投石に対して憲兵隊長が抜剣して迫ることもあった。また、デモの集合場所である鈴子公園広場近くには製鉄所長の社宅があった。そこでデモ隊が勢い余って所長宅に乱入し、邸内の器物を破壊することも起こった。同じ日には鈴子公園内にある創業者の田中長兵衛と横山久太郎の銅像が危うく引き倒されそうになった。また大橋採鉱場からダイナマイトが紛失するという事も起こった（荒木田,1952:57-61）。ここまでのことは翌年の八幡製鉄所の争議の時にも起こらなかった。釜石は狭隘の地であるため、大勢の人間が集まるための場所も限られている。平時にはそうした利便の良い場所には職員社宅や製鉄所関連施設が配せられ

るために、こうしたことが偶発的に起こったと現在の視点からは推察できる。

八幡製鉄所の争議には、その鎮圧のために警官と憲兵は出動したが、小倉の歩兵第14聯隊は待機したにとどまった。ところが釜石のストライキの時には、荒木田によると在郷軍人が臨時召集されただけでなく、岩手県知事の要請を受けた第8師団から、まず盛岡の工兵第8大隊が、次いで青森の歩兵第5聯隊から合わせて三個中隊約350名の将兵が争議の鎮圧に派遣されている。その光景は、町内から鉱山にかけて要所に着剣した歩哨が立ち、市街と製鉄所を結ぶ要衝である大渡橋を通過する者に誰何が行われたという（荒木田,1952:41-79）。このとき釜石はさながら戒厳令が布かれたようだったわけである。

また、この争議は「労働8時間制」「退職手当の支給」「労働者の人格尊重」等という今日では当然の18ヶ条の要求が郡長、釜石町助役、県議、町議、住職といった町の有志の調停を経て認められることになった。しかしその後、300余名が検挙され、荒木田忠太郎以下63名が盛岡地裁に起訴されることになった。そして公判中に死亡した一名を除き全員が騒擾罪などで有罪となった。このころの争議の特徴は、大河内が指摘するように、荒れた暴力行為があり外見的には派手で勇壮に見えるが、結局は官憲の介入と検挙、指導者の投獄を招いて終わってしまうことである（大河内,1970:73-77）。釜石の争議もその例にもれない。

この争議の真っ最中である12月の幾日かに、田中鉱山の本社から三鬼隆氏<sup>(7)</sup>（1892～1952。以下敬称略）が釜石に「本社釜石間の連絡本社員」（山本編,1956:151）として派遣されている。「大学時代労働問題に関心<sup>(8)</sup>」を持」（三鬼隆回想録編纂委員会,1952:58）っていたことから三鬼がこの任務に選ばれた。この時、三鬼がどこにいて何をしたかということは、伝記や回想録にも詳らかになっていない。後年に三鬼本人が争議の解決にあたったように書かれているものもあるが、これは入社一年目の三鬼の立場からして多分に推測が混じっている。しかし、三鬼がこの硝煙も棚引くような争議の現場を実際に見聞したことは確かである。「人の和」を好み、それを大事にすることを終生心がけた三鬼にとって、こうした紛争が今後は起こらないようにと、そこから肌で感じるものは大きかったと思われる。そして翌年1920年3月に三鬼は釜石製鉄所の庶務課長として赴任することになる。

## 2-2 真道会の結成

三鬼によって、釜石製鉄所にとっては画期となることが行われた。それは三鬼の考案で「真道會」（以下当用漢字を用いる）が創設されたことである。それは職員と職工が分け隔てなく会員となって、その運営が行われた一種のアソシエーションである。真道とは社長の二代目田中長兵衛の「健

---

(7) 三鬼隆は、没後50年を経過したことに加え、これまで伝記と回想録が合わせて4冊も刊行されている。三鬼はわが国鉄鋼産業の発展の中で、その生涯を公人として活躍した人物であるため実名で示す。

(8) 三鬼の東大入学直前の1910年には大逆事件が起きており、在学中の1917年にはロシア革命が起こっている。そして当時の東大法科内には上杉慎吉派と美濃部達吉派の対立があった。また先輩や同級に賀屋興宣、星野直樹が在学している一方で河合榮治郎、河上丈太郎、細川嘉六、矢内原忠雄も在学していた。こうした環境にあった当時の帝大生は「労働問題など知らんではすまなかった」（一柳,1959:56）という。

げなる意気と真の心もて正しき道をとに進まん」(富士製鐵釜石製鐵所,1956:452)という言葉の中から二文字をとって名付けられた。その前身は、1911年に製鐵所で組織された職工救済会であるが、前述した激しい争議の「苦い経験に鑑み」(富士製鐵釜石製鐵所,1956:76)、その翌年1920年の紀元節2月11日を選び発会式が行われた。そして、真道会はその目的を「釜石鉱山従業者相互ノ意志ノ疏通ヲ計リ真心正道ヲ旨トシ鉱業所ト円満ナル聯絡ヲ保チ生活ノ向上安全ヲ期シ福利増進ヲ図ルコト」(百年史編纂委員会編纂,1986:895)とする工場委員会である。わが国における工場委員会の歴史的な位置づけについては後述するが、真道会の場合、その名称が社長の言葉から採られていることや、紀元節を選んで発会式が行われていることから、その性格は暗黙裡に理解することはできる。発会式は三鬼の釜石着任の直前であるが、その「結成の発案は、この年、庶務主任として赴任した三鬼隆による」(百年史編纂委員会編纂,1986:103)ものだと考えて間違いない。

その組織と運営については1928年頃のことを、釜石製鐵所の100周年記念史に詳しい。それによると真道会は工場単位に五区に分かれ、各区に代議員会を設置していた。会員20名ごとに代議員一名を選出し、代議員の中から会長と副会長を互選していた。そして鉱業所を統合して評議員会を設置し、会長一名(初代は病院長、以後は次長、三鬼、所長など)、副会長二名(会長推薦と評議員の互選で各一名)、評議員若干名がおかれた。評議員会で実際に協議決定されたことは、子弟のための工業補修学校の設置、入営者の優遇、家族のための裁縫教授所開設、休憩所に洗面所設置、娯楽設備をなすこと、葬式用具の貸与といった賃金や就業条件を除く家族を含めた生活一般にわたることであった(百年史編纂委員会編纂,1986:895-896)。それだけでなく、撞球会、写真部、大弓部が発足し、家族のための水泳場がつけられ、理髪所も設置されるようになった(百年史編纂委員会編纂,1986:104)。こうしたことは現在の言葉でいう企業の文化サークルや企業内福利厚生「はしり」というわけである。

そして発会初年の1920年11月14日には真道会のメイン・イベントとして職員と職工そして家族も総出で「陸上大運動会」が鈴子公園グラウンドで盛大に行われた。参加者は職員129名、職工478名で、午前8時から午後4時まで50余回の競技が行われた。スタートの合図には村田銃を撃ち、三鬼本人が100メートル走と高跳びで二等を取ったというから、ほのぼのとした様子が偲ばれる。そして和気藹々の下に散会したという(百年史編纂委員会編纂,1986:104-105; 鉄鋼新聞社編,1974:104)。

職員数と職工数を弁別したデータは所史にも時系列で揃っていないため、近い年次で見ると1901年の職員数は145人、1921年の職工数は2,641人(富士製鐵釜石製鐵所,1956:423-424)であるから、この運動会には職員のほぼ全員が参加したと見られる。そして当時、坑内は三交代制、坑外は二交代制をとっていた(百年史編纂委員会編纂,1986:905)職工もかなりの人数が参加していることがわかる。

運動会を企画した三鬼の意図は「従業員の気分を明朗にし、上下の和を生ぜしめ、明日の生産意欲を昂めよう」(山本編,1956:107)というものである。しかし、真道会の行事として行っている以上、それは僅か一年前に起こった争議を繰り返させないように、職員と職工が現場での身分を越えた交流をすることで労使協調の雰囲気をつくるという意図も当然あると言わざるを得ない。このとき三鬼は弱冠29歳とはいえ、庶務主任として管理職の末席を汚す立場だったからである。

図らずしてそうなったのか、今となっては確かめようがないが、運動会が行われたグラウンドは、

争議の際にデモ隊が集合した鈴子公園前広場である。その同じ場所に職分を越え、共に汗を流し、スポーツで競い合うアソシエーションを現出させることは、争議の記憶を払拭させるのに大きな影響があったと思われる。真道会は、職員と職員の垣根を取り払った団体という意味では、確かにアソシエーションであるが、労使協調の目的を持って設立された団体であることを消し去って理解するわけにはいかない。本節冒頭で真道会を「一種」のアソシエーションと表現したのはそのためである。

ところが、こうした考えに思いもよらなかった製鉄所次長は「高炉作業は年中無休である。そんな事をやっているのは、他の者はよいとしても、高炉従業員は拱手傍観の外ないから困る。大体、三鬼は遊び好きである」(山本編,1956:107;鉄鋼新聞社編,1974:106)と所長の面前で頭から決めつけた。その結果、翌年には運動会は開かれなくなり、活動写真を上映する慰安会が行われるにとどまってしまう。それどころか、三鬼自身も不本意ながら本社に転勤させられることになってしまった。後に「釜石市の名物」(昆,1979:151)とまでいわれた、会社主催の運動会が復活するのは、後述するように製鉄所が三井系になり三鬼が庶務課長として再び来釜する1928年まで待たなければならぬ。

ここで、わが国における工場委員会の歴史的な位置づけについて考えてみたい。大河内一男の指摘するように、ときの政府と使用者は「工場委員会」「労働委員会」「工場協議会」といった労使協議制を設けることによって、第一次世界大戦後の時期に起こった労働組合の活発化、労使紛争の頻発といった事態を乗り越えようと考えていた(大河内,[1962]1972:310-321)。また造船業や鉄鋼業の大企業はこの時期に急速に進展した技術革新に対応するために、労務管理のあり方を請負人などと呼ばれる労働ボスによる労務供給から直接的管理体制に改めつつあった(兵藤,1971:252)ので、労使の意思を疎通する機関をつくることによって労働組合の形成が阻止できるならば、二重に都合だったわけである。そのため、結局は実現には至らなかったが、その実現に向けて1919年には内務省社会局が、1921年には協調会が労働委員会法案<sup>(9)</sup>を作成している。

こうしてみると、ここまで述べてきた真道会のあり方は、わが国の労使関係が揺籃期にあるときの一齣に過ぎないことがわかる。協調会の調査によれば、1910年から1920年の間に簇生した労働委員会は官営、公営、民営の企業を合わせて112社になり、その適用を受ける従業員は32万人にも上った(中村,1929:526)。因みに、軌を一にするようにして八幡製鉄所においてもストライキ後の1920年5月に製鉄所懇談会、6月に製鉄所組伍長研究会が発会している(八幡製鉄労働組合,1957:3)。そして実業団野球チームの前身となる職員と職工が一緒になった八幡製鉄所野球チームもこのとき

---

(9) その第三条は「労働委員会八企業者及被傭者相互間ノ理解及信頼ニ基キ雇傭関係ヲ調整シ被傭労働者ノ境遇ノ改善及産業ノ発展ヲ図ルコトヲ目的トス 労働委員会八前項ノ趣旨ニ依リ当該企業ノ生産能率及被傭労働者ノ福利ノ増進ニ関スル事項其ノ他被傭労働者ニ共通ノ利害アル事項ニ付キ企業者ノ提案ヲ審議シ又八意見ヲ開陳スルモノトス」(中村,1929:525)である。前出の真道会の目的と要素は共通している。三鬼は釜石に赴任する際に「協調会などで種々研究して来た」(鉄鋼新聞社編,1974:95)と語ったというから、こうした案をいち早く取り入れることは可能だったと思われる。先に「結成の発案」は三鬼によるものとして間違いのないとしたのは、このことからである。



結成されている（安永,1950:414）。

ところが工場委員会の目的は労働条件以外の「福利増進」という包括的なものであるから、その運用によってその機能は多様化することもある。釜石製鉄所の真道会においては地方選挙との関係が特筆される。周知のことであるが、わが国の衆議院議員選挙に対して普通選挙法案が可決されたのは1925（大正14）年である。ところが、それに先立つ1921年の市制町村制の改正によって、既に町村の選挙に限って等級選挙制度は廃止されていた。だからわが国の普選の濫觴は町村レベルの地方議会選挙にあり、その意味で釜石町において初めて行われた普選は1925年5月の町議選である。

現代においても全く同じことであるが、限定された一つの地域を選挙区とする選挙ならば、その地域に工場を立地し多数の従業員を擁する企業の影響力はきわめて大きい。普通選挙制度の成立は、釜石のような大工場を擁する産業都市では、地付きの旦那衆に加えて、職員や職工といった会社関係者の政治参加を可能にしたわけである。地方議会に議員を当選させることで地域社会と共存しながら発展を図るとするならば、それは真道会会員の福利を増進することにもなる。そう考えるならば真道会は地方選挙に際して候補者を推薦することもできるし、票を固めることもできるわけである。真道会は職員と職工が共に会員となっているから、会社出身の立候補者を職員、職工が揃って推薦することができる。こうして1925年の町議会選挙には職員2名、職工3名、そして請負人<sup>(10)</sup>と呼ばれる労働者供給業者2名の合計7名が「真道会推薦」（1956:518）で立候補し当選を果たしている。

次の釜石町議会選挙（1929年5月）に「真道会推薦」（1956:519）で立候補したのは表1の10名である。前年に釜石に戻った三鬼自身は居住年数が短いため、町政上有為な人物として町議会の「決議を以て被選挙権」（荒木田[1935]1963:895）を付与され立候補している。そして真道会推薦者は全員が当選している。議員定数は30人であるから、選挙の結果10名全員が当選しているということは、議会の1/3を真道会すなわち製鉄所関係者が占めることになったわけである。得票数を見ると、当選した10名の市会議員に投ぜられた票の総数は1,273票である。トップ当選者は148票、当落が決まるラインは74票であった。

表1 釜石町議会議員選挙（1929年5月1日）  
真道会推薦者得票数

| 氏名     | 職業   | 得票数   |
|--------|------|-------|
| 八木新平   | 製鉄職工 | 148票  |
| 高橋金助   | 製鉄職工 | 148票  |
| 藤村哲之   | 製鉄所員 | 143票  |
| 牟田巽    | 製鉄所員 | 140票  |
| 三鬼隆    | 製鉄所員 | 125票  |
| 菊地巳之太郎 | 請負人  | 122票  |
| 山本澄    | 製鉄職工 | 118票  |
| 秋山与四郎  | 製鉄職工 | 116票  |
| 斉藤憲吉   | 製鉄所員 | 114票  |
| 板澤助四郎  | 請負人  | 99票   |
|        | 合計   | 1273票 |

資料：『岩手日報』昭和4年5月3日，  
富士製鐵釜石製鐵所（1956：519），  
山本祐二郎編（1956：80）から作成

(10) 戦前の釜石製鉄所では、職員、工員、臨時工のことを「所員」「職工」「請負人夫」と呼んでいた。釜石鉱山の飯場制度が廃止されたのは1921年であるが（橋本,1926:135）、公共の職業紹介所ができたのは1937年なので（釜石市誌編纂委員会,1977:651）、それまでは私的な労務供給業者が存在していた。その労務供給業者が請負人であり、その下に雇用されているのが請負人夫である。その請負人も製鉄所関係者として真道会の推薦を受けて立候補している。

票が同一の候補者に固まっては、10名もの当選者を出すことはできない。従って票の按配なしに当選し得ない得票のあり方である。選挙年である1929年のデータは資料による裏付けができないが、その3年後の1932年の釜石町の人口は30,480人で、そのうち有権者数は5,132人である（釜石町役場,1933）。1929年の有権者数は、これよりやや少ないが同じ程度と思われる。この年上半期の釜石鉱業所の男子従業員数は2,459人であるので、表1の得票数の合計1,273票はその半分を上回る程度ということになる。ところが普選とはいっても、市制町村制の町村制第7条の公民の要件は、二年以上その町村に居住する満25歳以上の男子であったから、男子従業員数と有権者数の人数は同じではない。24歳以下の若者、または他所から職を求めて移ってきた者の多い製鉄所としては、かなりの組織力である。無党派層や浮動票などほぼあり得ない理由について、前出の荒木田忠太郎は「鑛業所の真道会なる従業員團體が結束協議し、代表的候補を豫選決定の上、各課會員が各々其當選を期し、統制も亦能く保たれた」（荒木田[1935]1963:888）と述べている。また「殊に釜石鑛山の労働者は隊伍をなして選挙場に押しかけたのは人目をひいた」（『岩手日報』1929年5月2日）とまで報道されていることから、棄権者が出ないようにしていた様子もうかがえる。真道会が明確に立候補者の推薦を行ったのはこの二回の選挙である。この時代の真道会は、こうした政治機能も持っていた<sup>(11)</sup>。

ところが、こうした労職一体となった地方議会への進出は、一步間違えば企業による地方議会の専横、ひいては地域社会を壟断することにつながりかねない。政治というものには、当初は地域社会との共存を意図した行動でも、思わざる結果を生み出す危険性をはらんでいるものである。住民のチェック機能が未熟なこの時代に、そうしたことを防ぐにはあらゆることに気配りができ平衡感覚に優れた人物を議員に推薦することが要請される。そのためにはそうした企業人が養成されていなければならない。三鬼に代表されるそのような優れた企業人がどのように社会的に形成されたかを次節以下に述べることにする。

### 2-3 三鬼隆の経歴

争議の解決に関わり真道会を創設した三鬼隆とはどんな人物であったのだろうか。その伝記から経歴に触れてみたい。三鬼隆は、岩手県庁の官吏である三鬼鑑太郎の五男四女の兄弟姉妹の次男として、1892（明治25）年に岩手県盛岡市に出生した。長男は夭逝したため実質的な長男として育てられた。父の鑑太郎は下閉伊郡や和賀郡の郡長を務めた後、花巻と仙人峠を結ぶ花巻軽便鉄道を建設して社長になり、1936年には衆議院議員にも当選している岩手県の知名人である。三鬼は、盛岡

---

(11) 真道会は、その後、産業報国運動の進展と共に現場ごとの部隊組織となった。そして第二次世界大戦の終結後、1946年1月に釜石製鉄労働組合が結成されることになったが、真道会は廃止されなかった。それは文化、スポーツ部門を担う親睦機関として残ることになった（富士製鐵釜石製鐵所,1956:452-453）

そして真道会は現代も存続している。例えば、文化庁が県を通じて開催している国民文化祭には釜石市の実行委員として釜石製鉄所真道会からも1名の委員が入っている（第8回国民文化祭岩手県実行委員会編,1994:402）。国民文化祭の監事や委員は、他に商工会議所会頭、青年会議所理事長、ロータリー・クラブ会長、観光協会会長がつとめていることから、真道会が地域団体の一つとして根付いていることが分かる。

師範学校付属小学校から高等科二年修了で盛岡中学に入学。青葉城下の第二高等学校一部乙類（文科で独法）を卒業後、東京帝国大学法科大学独法科に進学し1917年に卒業。1年間就職せず浪人し、1918年に父の知人のつてで、会社組織が株式会社になった翌年の田中鉱山東京本社に入社した。東大卒法学士の初めての採用だった。そこで二代目長兵衛の息子で副社長の田中長一郎の下で調査課の仕事に就き、小笠原諸島の事業の整理に関わっている（富士製鐵釜石製鉄所,1956;山本編,1956;鉄鋼新聞社編,1974）。

東京市京橋区北紺屋町にあった田中鉱山本社、通称「田中本店」は、現在の新日本製鉄株式会社の最も古い前身である。ところが、明治30年代になっても、そこには薩摩藩島津家の御用商人として屋号を「鐵屋」と称した金物問屋の雰囲気が残っていた。三鬼が就職する少し前までの本店の様子は「帳場では、社長は和服の着流し、社員は前がけに角帯という姿で机を並べ、社員が社長を呼ぶ時は旦那、社員同士は『長ドン』『久ドン』と云った具合に」（村井,1955:76-77）呼び合っていたというから、暖簾内の生活を彷彿とさせる。また田中長兵衛の長男安太郎は社長に就任すると二代目長兵衛を襲名しているし、番頭であり釜石製鉄所の責任者である横山久太郎は初代田中長兵衛の女婿である。さらに「経理会計の仕事は金を扱うので田中一族か又は最も信任の厚かつた人」（富士製鐵釜石製鉄所,1956:488）が握っていた。この当時の東京帝大法科卒業者は無試験で司法官試験補になれたのに、三鬼がこうした商家同族団に就職したのはいかなる天の匙加減だったのであろう。

ところが、その田中鉱山は第一次世界大戦後の不況により経営が立ちゆかなくなり、三井に経営が譲渡されることになった。そこで三鬼は、三井系の企業の出身ではないにもかかわらず牧田環

表2 三鬼隆の経歴（その1）

|             |   |
|-------------|---|
| 1918（大正7）年  | 田中鉱山東京本社に入社                                     |
| 1919（大正8）年  | 労働争議中の釜石に派遣される                                  |
| 1920（大正9）年  | 田中鉱山釜石鉱業所・庶務主任として釜石に転任                          |
| 1921（大正10）年 | 不本意ながら本社に転勤を命ぜられる                               |
| 1924（大正13）年 | 鉱山の経営が三井に譲渡され、釜石鉱山本店・庶務主任。同年に釜石鉱山会長である牧田環の秘書となる |
| 1928（昭和3）年  | 釜石鉱業所の庶務課長として転任。再び来釜する                          |
| 1930（昭和5）年  | 釜石鉱業所・運輸課長兼任となる                                 |
| 1931（昭和6）年  | 釜石鉱業所・事務長に昇任する                                  |
| 1934（昭和9）年  | 日本製鉄創立で日鉄参事。同時に釜石製鉄所・庶務部長となる                    |
| 1937（昭和12）年 | 日鉄理事に昇格   |
| 1938（昭和13）年 | 清津に製鉄所を建設するため、その所長に内定し日鉄本社に転任するため離釜             |
| 1939（昭和14）年 | 清津製鉄所所長   |
| 1940（昭和15）年 | 日鉄取締役   |
| 1943（昭和18）年 | 八幡製鉄所次長   |
| 1945（昭和20）年 | 八幡製鉄所所長   |
| 1946（昭和21）年 | 日鉄社長、日本鉄鋼連盟会長、経団連常務理事                           |
| 1947（昭和22）年 | 経済安定本部顧問  |
| 1948（昭和23）年 | 関東経営者協会常務委員、日経連代表常任理事                           |
| 1950（昭和25）年 | 八幡製鉄社長  |
| 1952（昭和27）年 | 搭乗した「もく星」号が大島の三原山に衝突し急逝。享年61歳                   |

資料：鉄鋼新聞社編（1974：844～853）から抜粋

の秘書に取り立てられるという幸運にあっている。そして再び釜石にて庶務課長に就任する。その後、製鉄合同を経て釜石の庶務部長になるも清津<sup>ちよんじん</sup>(<sup>12</sup>)に製鉄所を建設するために本社へ転勤する。製鉄所長として着任した清津では様々な困難の中で二基の高炉を操業させ、八幡製鉄所に次長として転勤。第二次世界大戦後はGHQによって日本製鉄社長の渡邊義介がパージされたため、図らずして日鉄社長に就任した。過度経済力集中排除法による日鉄の八幡製鉄、富士製鉄への分割後は八幡製鉄の社長に就任した。そして日経連代表、経団連常務理事、鉄鋼連盟会長などを歴任し、1950年には「次期通産相の候補」(大橋,1976:276)にも擬せられた。このような経歴は財界人として栄達の極みである。三鬼は一世代のうちに企業人としての階梯を登りつめ、終生わが国の鉄鋼界と共に生きた人物である。その経歴をまとめたのが表2である。

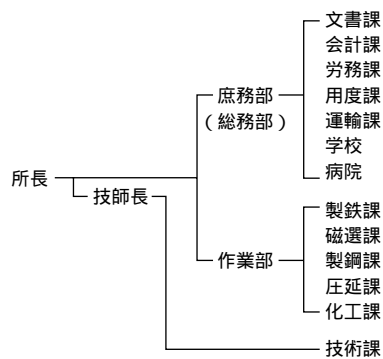
近代社会において、人間はただ一人のみの力では社会的に何事をも成し遂げることはできない。何事かを成し遂げるにはかならず多くの人間の協力が必要で、そこには人間の集団が発生する。そこで釜石において三鬼を中心とした企業人の集団がどのようにして形成されてきたかを次節で述べることにする。

#### 2-4 企業人の社会的形成とアソシエーション

三鬼は1928年に再び釜石に着任すると、かつて「遊び」とされたスポーツを愛好する者が増えており、所内に非公式ながら競技部ができていっているのを見て大変気をよくした(三鬼隆回想録編纂委員会,1952:149;山本,1956:37)。そうした中で、釜石製鉄所では1930(昭和5)年に「巴会」、1932年に「同好会」という二つの注目すべき職員のアソシエーションが三鬼を中心にして結成された。三鬼がそれぞれ38歳と40歳の時のことである。

巴会とは、現場の課長、次長クラスである技術課H氏(35歳)、工作課O氏(40歳)、動力課A氏(30歳)、圧延課K氏(35歳)、運輸課M氏(40歳)、化工課N氏(31歳)、および翌年には輪西製鉄所から転勤してきた製鉄課K氏(34歳)を入れた7人が三鬼を師匠として観世流の謡曲を習う会である(カッコ内は当時の年齢)。この少し

図2 釜石製鉄所の職制(1934年3月2日,日鉄発足時)



資料：富士製鉄釜石製鐵所(1956:182)

(12) 清津は、朝鮮半島北部の咸鏡北道に位置し、現在は北朝鮮に属している。日本海に面した良港を有し、陸路は圖們を介して東満州への門戸となる位置にある。1937年に日鉄は第五次拡充計画で清津に製鉄所の建設を決定した。そのため八幡、釜石、兼二浦から技術者、熟練工が配置転換された。当初は鉄鋼一貫製鉄所が計画されたが、500トン高炉が二基建設され製鉄を行うのに止まった。そして、1945年には日本人口約3万人の産業都市になっていた。清津の西に位置する茂山で粉鉍が採掘されたが、石炭は牡丹江のさらに東、ソ満国境も近い密山から輸送されていた。密山との間には満州国国有鉄道虎林線が1936年に開通していた(松本豊三編,1937;図書「清津」刊行会編,1963;鉄鋼新聞社編,1974;田中四郎ほか,1975)。

後の日鉄発足時の職制は図2の通りであったから、上記のメンバーは作業部各課の課長クラスが見事に結集していたことになる。

例会は週一回水曜に三鬼の自宅で行われた。その様子は、三鬼伝をまとめた小森田によると、謡曲の稽古が一通り済むと、その後は「課外授業」と称して酒がでて、得意のスポーツや遊びの話に移り、ついで端唄、サノサ節、ソーラン節、最新流行歌、中風の川渡りをうたいおどるということだった。弟子はの方が楽しみで、夜更けの12時、1時と続いたという。また三鬼にとっては、こうした機会に技術的なことや現場の実情を耳から仕入れることができたわけである。この巴会の夜はよほど楽しかったらしく、メンバーは異口同音に懐かしんでいるという（小森田,1954:251）。また巴会メンバーにF氏、後に総務部長となるG氏を加えて巴倶楽部という野球部をつくった。三鬼は自ら一塁、四番打者をつとめた。そして巴会は、そのメンバーが分別もついた30歳代の課長クラスであることから「単に謡の会、同好趣味の会であるだけでなく、釜石鉱山を明朗化しようとする同志的な結合『三鬼党の旗あげ』であった」（鉄鋼新聞社編,1974:182）わけで、別の言い方をすれば、巴会メンバーは三鬼の「一騎当千の『旗本侍』」（山本編,1956:50）になったのである。巴会は真道会とは性格が異なり、三鬼は職員の中から厳選されたメンバーを企業人として薫陶していこうとしたわけである。

そしてもう一つは「同好会」と呼ばれるスポーツ親交団体である。これは三鬼を会長として1932年に発足した。この会は当初、野球とテニスの同好者を統一するのが目的であったが、それ以外に陸上競技、水泳、スキー、スケート、弓道、柔道、剣道などあらゆるスポーツを奨励するものになった。会費は月額10銭とし、会員は職員の中で好きなものに止め強制はしなかったというが、職員のほとんどである120名が入ったという。前出の製鉄課K氏、技術課H氏、動力課A氏、運輸課M氏、化工課N氏ほか12名が監事となって運営された。同好会の名は動力課A氏が名付けた。そして翌1933年には機関誌『同好』も発刊されるようになった。圧延課K氏は、謡曲、弓、野球、テニス、スケートを三鬼と同様にこなし、とくにスケートをこなした。また化工課N氏はスキーのリーダーとなった（山本編,1956:37-41;鉄鋼新聞社編,1974:174;山本,1975:65）。前出の巴会の7名を核として、職員の参加者の輪を広げたアソシエーションが形成されたわけである。

そして同好会の準備と進行のもとに毎年職員と職工とその家族のための大会が行われるようになった。この大会は三鬼が旧制二高の寮祭から思いついた無礼講の場であった。そこでは各課ごとに装飾をこらした汁粉や焼き鳥などの模擬店を開き、課長が店主となって時には給仕も行った。そして広場では競技に加えて仮装行列も行われ、余興に鉱山音頭を唄ったりしたという（三鬼隆回想録編纂委員会,1952:147-150）。

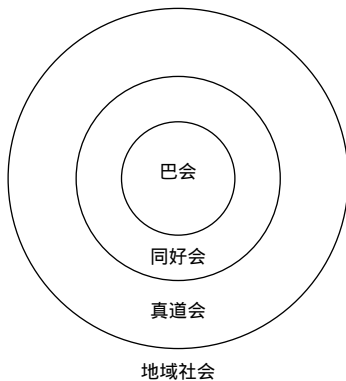
そうしているうちに同好会の陸上競技部の主催で所内青年団対抗競技会も開かれるようになり、それが岩手県を北上山脈を境にして分けた東西対抗の各種スポーツ競技大会の開催に進展していった。その第一回大会は、1934年に昭和園のグラウンドで開かれた。その様子は「釜石製鉄所陸上競技部は優秀な人材を集め、単独チームで相手側を圧倒するまで陣容を整えた」（岩手日報社,1970:175）という。それは神宮大会の400メートル競技で岩手県初の優勝を飾った佐々木正雄、走り高とび、十種競技の日本記録を持つ和賀行男、砲丸投げの横田孝といった全国レベルの選手が三鬼の招きによって在籍するまでになっていたからである。

そして硬式野球に関しては、その強化育成にマネージャーとして関わった山本祐二郎によると、それまでも所内にあったクラブを、1932年に同好会の野球部に統合し三鬼自身が初代部長となった。そして選手の強化育成を行い、1936年には県大会で優勝し、1938年には後楽園の都市対抗野球全国大会にまで進出するほどになった。三鬼は本社に転任するまで部長を続けたが、二代目の部長は製鉄課K氏が務めた（山本編,1956:58-66）

また三鬼は所内のアソシエーションの部長を務めるだけでなく、釜石町の野球協会会長もつとめることになった。上記のように陸上や野球で全国的な活躍をする選手が現れるということは、県下の旧制中学校からも優秀な選手を輩出しようとする刺激となる。このようにスポーツを振興することで、それを通して地域社会との接点ができるようになった。

こうしてみると、何かにつけ巴会の7名が核となって三鬼の発想を実現していったことがわかる。そして同好会、前出の真道会、そして社外の地域社会というように包含関係を広げていっているこ

図3 釜石製鉄所員の同心円的アソシエーション



とがわかる。こうした構造は以下の図3に描かれるような三層の同心円的アソシエーション<sup>(13)</sup>に要約することができる。そしてこの時代の集団形成の契機は、職場の上下関係を離れた、謡曲やスポーツといった文化を通してアソシエーションをつくり出すことにあった。

このような同心円的アソシエーションを通じて薫陶された「一騎当千」の三鬼党は企業人としてはどのような歩みをしたのだろうか。この7人の会社における経歴を以下の表3で示されるように描き出すことで当時の釜石製鉄所の課長クラス技術者の職業生活における生活構造を明らかにすることができる。

表3 巴会発足に参集した釜石製鉄所技術者の経歴

(1) 技術課H氏

| 生年            | 出身地  | 学歴            |
|---------------|--|---------------|
| 1895 (明治28) 年 | 京都府與謝郡   | 三高, 京都帝大機械工学科 |
| 1938年までの経歴    | 1920年, 三井鉱山入社, 三池製作所および三井染料工業所勤務。1927年, 釜石鉱山技師 (機械設計主任) に転ずる。1934年, 日鉄合同により釜石製鉄所・技術課長。                       |               |
| その後           | 1939年頃, 製鉄所建設のため清津へ。1944年, 空襲によって破壊された日鉄バريكパパン製鉄所 (南ボルネオ) の残存設備をスマラン (中央ジャワ) に移して再建すべく調査。その帰国途上に病院船阿波丸にて遭難。 |               |

<sup>(13)</sup> 「同心円的アソシエーション」とは、実はその語義から矛盾する言葉の合成である。本来、同心円的な集団や価値観の形成は伝統的コミュニティの特徴である。磯村英一が主張するように、農村的な生活構造は同心円的で、都市における生活構造は多心円の (磯村,1959:78-80) になるはずである。ところがこの時期の釜石においてはアソシエーションが同心円的に形成されている。しかも企業人を中心に地域社会にまで外延を広げている。こうしたことは三鬼のようなリーダーを得なければ、企業による地域社会の支配構造を形成してしまうことになる。

## (2) 工作課O氏

| 生年          | 出身地   | 学歴     |
|-------------|---|--------|
| 1890（明治23）年 | 岩手県上閉伊郡釜石町  | 大阪高等工業 |
| 1938年までの経歴  | 釜石小学校卒業後、1908年、小倉工業学校機械科卒業、釜石鉱山圧延課勤務。1914年、大阪高等工業卒業、古河鉱業入社、足尾鉱業所勤務。1916年、同社を退社、田中鉱山室谷鉱山事務所・主任。1919年、釜石採鉱所・機械主任。1920年、釜石採鉱所工作課・調査主任。1921年、釜石採鉱所鑄鉄課・次長。1924年、田中鉱山が釜石鉱山釜石鉱業所となるに及んで、機械科も分担する。1934年、日鉄合同により技師。1937年、釜石製鉄所・工作課長。 |        |
| その後         | 1939年頃、製鉄所建設のため清津へ。清津にて病死。  |        |

## (3) 圧延課K氏

| 生年          | 出身地  | 学歴             |
|-------------|--|----------------|
| 1895（明治28）年 | 栃木県足尾市   | 二高、東京帝大工学部冶金学科 |
| 1938年までの経歴  | 1923年、田中鉱山釜石製鉄所に入所。1937年、釜石製鉄所・圧延課長。その間、調査課製鋼課、工作課、圧延課を歴任。   |                |
| その後         | 1942年、釜石市会議員当選。1943年、輪西製鉄所製鋼部長。1948年、釜石製鉄所・技師長。1950年、富士製鉄取締役、釜石製鉄所・副所長兼富士製鋼所長。1952年、三鬼会副会長。1954年、東北特殊鋼社長。1956年、関東鉄器社長。 |                |

## (4) 運輸課M氏

| 生年          | 出身地   | 学歴          |
|-------------|---|-------------|
| 1890（明治23）年 | 東京市小石川区   | 熊本高等工業採鉱冶金科 |
| 1938年までの経歴  | 1914年、北海道炭礦汽船入社。1917年、日本製鋼所に転勤。1923年、同社依願退職。1925年、釜石鉱業所に入社、製鉄課長。1927年、釜石鉱業所・調査課長。1929年、釜石鉱業所・磁選課長。1938年、運輸課長。                                   |             |
| その後         | 1939年、清津製鉄所・運輸課長。1944年、日鉄を退社し日鉄清津運輸株式会社常任監査役。終戦時、ソ連軍の捕虜となるが九死に一生を得る。その後、八幡市に引揚げ。1947年、清津からの引揚組で八幡製鉄所の構内下請会社、清新組を設立し取締役社長。1960年、清新産業に社名変更、取締役社長。 |             |

## (5) 動力課A氏

| 生年          | 出身地  | 学歴        |
|-------------|--|-----------|
| 1900（明治33）年 | 福岡県小倉市   | 熊本高等工業電気科 |
| 1938年までの経歴  | 1921年、三井鉱山入社、三池鉱業所勤務。同年第12師団に1年志願兵として入営につき休職、除隊後復職。1924年、陸軍歩兵少尉任官。1929年、釜石鉱山に転勤。1934年、日鉄合同により釜石製鉄所・工作課技師。同年、在郷軍人分会釜石製鉄所分会長。1937年、釜石製鉄所に新設の動力課技師。 |           |
| その後         | 1946年、日鉄釜石製鉄所・工務部長。1950年、富士製鉄釜石製鉄所・工務部長。1951年、富士製鉄広畑製鉄所・工務部長。1952年、富士製鉄取締役、広畑製鉄所・工務部長。釜石市議会議員当選。1957年、本社建設部長。1958年、東海製鉄取締役。1959年、富士製鉄取締役、本社施設部長。 |           |

(6) 化工課N氏

| 生年            | 出身地   | 学歴          |
|---------------|---|-------------|
| 1899 (明治32) 年 | 山口県防府市  | 東京高等工業応用化学科 |
| 1938年までの経歴    | 1919年, 北海製鉄入社, 輪西製鉄所勤務。1930年, 釜石鉱山入社, 釜石鉱業所勤務。1934年, 日鉄合同になり, 同年釜石製鉄所・化工課長。1937年, 釜石市会議員当選。         |             |
| その後           | 1945年, 本社・化工課長。1948年, 釜石製鉄所・化工部長。1950年, 富士製鉄釜石製鉄所・化工部長。1952年, 富士製鉄取締役, 釜石製鉄所・化工部長。1953年, 釜石製鉄所・副所長。 |             |

(7) 製鉄課K氏

| 生年            | 出身地  | 学歴          |
|---------------|--|-------------|
| 1896 (明治29) 年 | 岩手県盛岡市   | 二高, 東京帝大工学部 |
| 1938年までの経歴    | 1920年, 日本製鋼所入社, 輪西製鉄所勤務。1931年, 釜石鉱業所製鉄課に転ずる。1934年, 日鉄合同により釜石製鉄所・製鉄課長。  |             |
| その後           | 1941年, 日鉄釜石製鉄所・製鉄部長。1942年, 日鉄本社作業局・次長。1943年, 日鉄輪西製鉄所・技師長。1945年, 日鉄広畑製鉄所・技師長。1946年, 日鉄取締役および広畑製鉄所長。1950年, 日鉄解体に伴い富士製鉄・常務取締役および広畑製鉄所長。 |             |

資料: 加茂久一郎編 (1938) および富士製鉄株式会社 (1954) を中心的な資料として, 富士製鉄釜石製鉄所 (1956), 野上辰男ほか編 (1960), 図書「清津」刊行会編 (1963), 鉄鋼新聞社編 (1974), 東京大学百年史編集委員会 (1982) から補って作成。表3は公刊された資料を総合したものとはいえ, 詳しく経歴に触れているため実名を伏せる。

この7人の経歴は, 明治に生まれ戦前戦中戦後の鉄鋼業の発展を支え, 釜石, 八幡, 輪西, 広畑, 清津, 名古屋というように国内外を問わず製鉄所を縦断した技術者の足跡である。これら生涯を鉄とともに過ごした明治人の経歴から看取できることは以下の通りである。

全員が工学系の帝大あるいは高等工業卒業の高学歴の技術者である。

釜石出身のO氏を除き, 他は出身地を離れている。

圧延課K氏, 製鉄課K氏, 動力課A氏, 化工課N氏は後に富士製鉄の取締役に昇進した。

新卒時に, M氏は北海道炭礦汽船, N氏は北海製鉄, K氏は日本製鋼所に就職したが, いずれも三井系になって事業を拡大しつつある釜石鉱業所に転社している。

出身地でないにも拘わらず圧延課K氏, 動力課A氏, 化工課N氏は釜石市議に当選した。

要約して換言すれば, これらの人々は工学の高等教育を受け, 鉱工業の民間企業に就職することによって職業人生の階段を上り始めている。その初期には鉱工業の会社の間で勤め先を変わっている場合もあるが, 鉄鋼産業の中で累進を続け, 最終的には東証一部上場企業の取締役として昇進を極めているものが多い。こうした姿は, 森川英正のわが国の技術者に関する研究, (1) この時代の工学士は技官として官庁に入っても, 待遇においてすぐに高等官になる法学士よりも恵まれていなかった。そのため官尊民卑の弊風の中でも民間企業, 特に鉱工業の企業に天地を見いだすことが多かった。(2) 技術者はテクノロジーという共通項を持っており, それは人において代替可能なため, 同じ産業の中で会社間移動を行うことは珍しいことではない。(3) 明治以降の急速な工業化過程の中でテクノロジーを不可欠の要因としたわが国の企業ではトップ・マネジメント, すなわち重役において技術者の比率が高い, といったこと (森川, 1975; 1974) を裏付けている。

しかし特筆すべき個性は, この7人は, 30歳~40歳代の壮年の年代に釜石に落ち着き, 謡曲やス



スポーツのアソシエーションを結成し、地域政治に関わりをもった人もいることである。そして三鬼が離釜する1938年頃にはこれらの人物はそろって課長になっている。それだけでは企業における技術者の出世物語に過ぎないが、これらの人々は三鬼と接することによって、狭い専門に立てこもるのではなく、広い視野に立つことと深い教養や社会常識を身につけたことが重要である。明治20年～30年代生まれの人物の親の世代は明治維新前の江戸時代の記憶がある。その子供は、工学を専攻とする者でも、社会常識として謡曲を嗜む素地を持っていた。

こうした人物が戦中、戦後の鉄鋼産業を支えトップに立つことになっていった。冒頭に述べたように、リーダーに必要な、広い視野と深い教養は一朝一夕には身につけることができない。また人間はその準拠する集団の背中を見て育つものである。社外においても人間の幅を広げている人材が、社内において累進していく生活構造が三鬼の時代の釜石にはあったといつてよい。

戦後、わが国の大企業においては年功賃金制度の創出と福利厚生充実によって、その従業員は企業外の地域社会に関心を持たないようになった。冒頭の節で述べたように、それはメトロ・コーポレーションを形成することになる。ところが、この時期の釜石においては三鬼のリーダーシップの甲斐があって、そうしたことにはならなかった<sup>(14)</sup>。

### 3 まとめ

三鬼は、八幡製鉄社長や日経連理事といった華々しい財界人の経歴とは別に、岩手県の釜石という地域的なレベルにおいて議員に立候補し当選し、またそこで構成された団体や集団に所属し、会を主催した人物である。それらを表4にまとめた。これと、前節表3の7人の課長クラスの経歴を見ると、優れた企業人の社会的形成にアソシエーションの果たした役割がいかに大きかったかということがわかる。優れた企業人とは、広い視野と深い教養からバランス感覚を持って、リーダーシップを発揮できる人物のことである。そうした人物は企業内に関心を止めず地域社会の政治にも目配りを持って参与できるわけである。

確かに、企業籍のあるまま地方議会に立候補することは、わが国において三鬼が初めて行ったことではない。等級選挙時代の1923年に、釜石でも製鉄所次長の中田義算が県議員になっているし、前述したように市制町村制が改正されてからは職員や職工が多数立候補するようになっている。官営製鉄所のある八幡市でも製鉄所関係者「3人が市議員に当選」（鉄鋼新聞社編,1974:133）するようになってきている。しかし、謡曲やスポーツといった文化的アソシエーションを通じて部下を薫陶して地方議会に立候補させたこと。有望な選手を企業に招いて企業及び地域におけるスポーツを振興させたこと。地域との交流を図るために運動会を開いたこと。そうした社会的なことすべて

(14) 会社員の宿命として三鬼が本社に転勤すると間もなく巴会だけでなく同好会も運営されなくなった。そして製鉄所大運動会は真道会の行事となった。そうした三鬼が去った後の1950年代の釜石市の生活構造については新明正道・田野崎昭夫・鈴木廣・小山陽一・吉田裕の研究（新明正道ほか,1959）の「分析図式」「経済過程」「媒介過程」「政治過程」に詳しい。さらに1970年代後半の釜石市については田野崎昭夫らによる研究（田野崎編,1985）が参考になる。

表4 三鬼隆の経歴(その2)

|             |   |
|-------------|---|
| 1929(昭和4)年  | 釜石町会議員に当選。釜石青年団副団長                                      |
| 1930(昭和5)年  | 謡曲の会「巴会」をつくる  |
| 1931(昭和6)年  | 「真道会」会長。釜石野球協会会長  |
| 1932(昭和7)年  | スポーツ、趣味の総合団体「同好会」をつくる                                   |
| 1933(昭和8)年  | 三陸大津波に際して救済に活動。町会議員に再選                                  |
| 1934(昭和9)年  | 製鉄所陸上部の強化に力を入れ、和賀行男、佐々木正雄を招き入れる。第一回岩手県東西対抗陸上競技大会を昭和園で開く |
| 1937(昭和12)年 | 釜石市会議員に当選   |

資料：鉄鋼新聞社編(1974:844~853)から抜粋

を通じて部下を優れた企業人として成長させ、地域社会も発展させるという生活構造を拓いた嚆矢は三鬼隆であるということをも本研究の結論としたい。

《付記》 本研究をまとめるにあたり岩手県の鉱工業や労働事情、それに加えて戦前戦中の日本社会のあり方について、桑原敬一氏からたくさんのご教示いただいた。また、宮川浩氏からは釜石製鉄所や君津製鉄所の所史、組合史をお借りした。お二人にはこの場を借りてお礼を申し上げる。

さらに、投稿後の加筆に際して『大原社会問題研究所雑誌』のレフェリーからいただいた懇切なコメントが主題の明確化に大変参考になった。あわせてお礼を申し上げる。

(たかぎ・としゆき 敬愛大学国際学部・非常勤講師)

#### 【引用文献】

Eells, Richard., *The Meaning of Modern Business: An Introduction to the Philosophy of Large Corporate Enterprise*, New York: Columbia University Press. 1960年(企業制度研究会訳『ビジネスの未来像 協和的企業の構想』雄松堂書店, 1974年)。

荒木田忠太郎『狼火拳る 釜石鑛山労働騒動実記』荒木田忠太郎発行, 1952年。

荒木田忠太郎「釜石町政今昔譚」加茂久一郎編『東北民論』, 1935年(釜石市誌編纂委員会(1963)に収録)。

磯村英一『都市社会学研究』有斐閣, 1959年。

一柳正樹『官営製鐵所物語(下)』鉄鋼新聞社, 1959年。

岩手縣鑛業會編『岩手縣鑛山誌』岩手縣, 1950年。

岩手日報社編『岩手のスポーツ人』岩手日報社, 1970年。

大河内一男「第一次大戦後における労使関係と『工場委員会』 企業別労働組合のための試論」大河内一男『労使関係論の史的発展』有斐閣, 1972年(初出は「経営内労使関係における二つの形態 企業別労働組合のための試論」中村常次郎・大塚久雄・鈴木鴻一郎編『企業経済分析(脇村義太郎教授還暦記念論文集)』岩波書店, 1962年)。

大河内一男『暗い谷間の労働運動 大正・昭和(戦前)』岩波書店, 1970年。

大橋初郎『岩手県政夜話』大橋初郎記者の記録刊行委員会, 1976年。

岡崎哲二『日本の工業化と鉄鋼産業 経済発展の比較制度分析』東京大学出版会, 1993年。

小倉健男『仙人峠を越えて 陸中釜石小倉一族の譜』下町タイムス, 2001年。

釜石鑛山労働組合史編纂委員会『釜石鑛山労働運動史』釜石鑛山労働組合, 1966年。

釜石市誌編纂委員会『釜石市誌(史料編四)』釜石市, 1963年。

釜石市誌編纂委員会『釜石市誌(通史)』釜石市, 1977年。

釜石製鐵労働組合史編纂委員会『釜石製鐵労働運動史』釜石製鐵労働組合, 1961年。

- 釜石町役場『釜石町勢要覧（昭和7年度）』釜石町役場発行，1933年。
- 加茂久一郎編『市制記念 釜石大観』釜石大観編集部発行，1938年。
- 倉沢進『日本の都市社会』福村出版，1968年。
- 小島精一編『日本鉄鋼史（大正前期篇）』文生書院，1984年。
- 小森田一記『日本財界人物伝記集（11）渡邊義介伝・三鬼隆伝』東洋書館，1954年。
- 昆勇郎編『写真集 明治大正昭和 釜石』国書刊行会，1979年。
- 新日本製鐵株式会社『NIPPON STEEL MONTHLY』vol.109（2001年6月号）。
- 新明正道・田野崎昭夫・鈴木廣・小山陽一・吉田裕「産業都市の構造分析 釜石市を手がかりとして」『社会學研究』（東北社会学研究会）第17号，1959年（『新明正道著作集第10巻』誠信書房，1985年に再録）。
- 第8回国民文化祭岩手県実行委員会編『第8回国民文化祭いわて 93 公式記録』文化庁・岩手県，1994年。
- 高木俊之「岐阜県大垣市におけるメゾ・コーポラティズムの実相 地域情報産業振興ビジョンの策定をめぐって」『地域における「公共性」の再編成（地域社会学会年報第14集）』ハーベスト社，2002年。
- 田中鑛山株式会社『釜石鑛山事業概要』非売品，1922年。
- 田中四郎ほか『清津脱出記』日鐵企業，1975年。
- 田野崎昭夫編『企業合理化と地方都市 釜石市における対応と展開』東京大学出版会，1985年。
- 鉄鋼新聞社編『鉄鋼巨人伝 三鬼隆』鉄鋼新聞社，1974年。
- 東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史（部局史三）』東京大学，1982年。
- 図書「清津」刊行会編『別冊清津 清津関係者消息報告』非売品，1963年。
- 中川敬一郎『比較経営史序説』東京大学出版会，1981年。
- 中村英雄編『最近の社会運動』協調会，1929年。
- 日本製鉄株式会社史編集委員会『日本製鉄株式会社史』日本製鉄株式会社史編集委員会，1959年。
- 野上辰男ほか編『人物北九州』国民新聞社，1960年。
- 橋本能保利「本邦製鐵業労働事情概説（三）」『社会政策時報』第66号（1926年3月）。
- 半沢周三『日本製鐵事始 大島高任の生涯』新人物往来社，1974年。
- 百年史編集委員会編纂『鐵と共に百年』新日本製鐵株式会社釜石製鐵所，1986年。
- 兵藤劔『日本における労資関係の展開』東京大学出版会，1971年。
- 富士製鐵株式会社『有価証券報告書 昭和29年下期』（野村総研『NRIマイクロ有証』所収），1954年。
- 富士製鐵釜石製鐵所『釜石製鐵所七十年史』富士製鐵釜石製鐵所，1956年。
- 古島敏雄「最終講義 道と車 近世交通史の一齣」『専修大学社会科学研究所月報』No.236，1983年。
- 松本豊三編『南滿州鐵道株式會社三十年略史』南滿州鐵道株式會社，1937年。
- 丸山眞男『忠誠と反逆 転形期日本の精神的位相』筑摩書房，1992年（初出は「忠誠と反逆」小田切秀雄編『近代日本思想史講座（6）自我と環境』筑摩書房，1960年）。
- 三鬼隆回想録編集委員会『三鬼隆回想録』八幡製鐵，1952年。
- 村井信平『田中時代の零れ話』私家本，1955年。
- 森川英正「明治期『工科大学』卒会社技師のリスト」『経営志林』第11巻第2号，1974年11月。
- 森川英正『技術者 日本近代化の担い手』日本經濟新聞社，1975年。
- 安永渡平編『八幡製鐵所五十年誌』八幡製鐵株式會社八幡製鐵所，1950年。
- 山本祐二郎編『人間三鬼隆』三鬼会，1956年。
- 山本祐二郎『鐵と共に30年 自記回想録』山本祐二郎発行，1975年。
- 八幡製鐵労働組合『八幡製鐵労働運動史（上巻）』八幡製鐵労働組合，1957年。